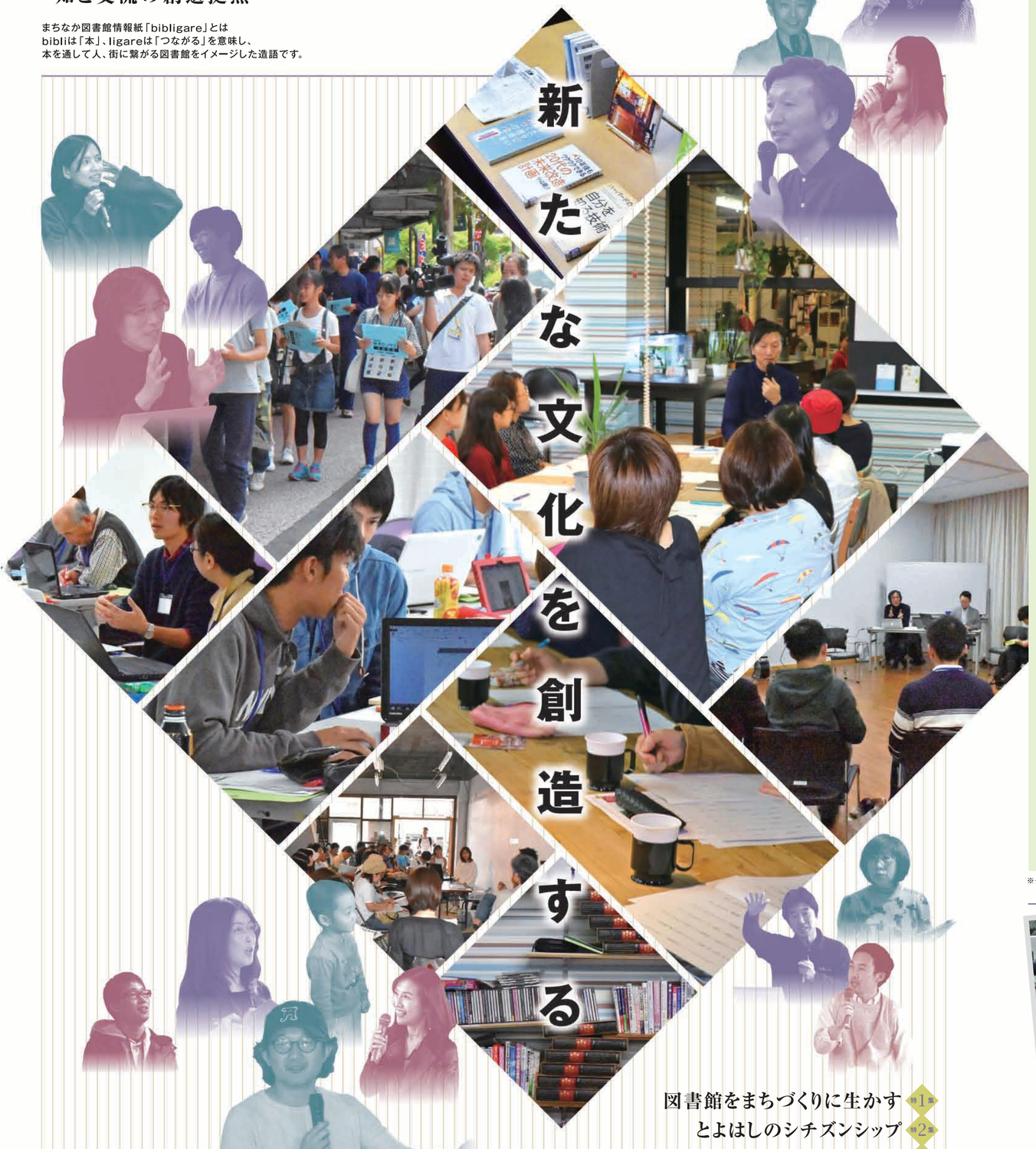
bibligare vol.3

まちなか図書館情報紙――[ビブリガーレ]

世界を広げ、まちづくりに繋げる “知と交流の創造拠点”

まちなか図書館（仮称）は
平成33年度
開館予定

まちなか図書館情報紙「bibligare」とは
bibliは「本」、ligareは「つながる」を意味し、
本を通して人、街に繋がる図書館をイメージした造語です。



図書館をまちづくりに生かす 特1集
とよはしのシチズンシップ 特2集
まちじゅう物語化計画 特3集

◆発行＝豊橋市

まちじゅう物語化計画

小説やアニメの舞台になった場所や店を訪ね、登場人物に自分を重ねて楽しむ「ブックツーリズム」が注目されています。例えば、J・Kローリングの小説『ハリー・ポッター』シリーズに登場するホグワーツ特急の始発駅として知られるロンドンの「キングス・クロス駅」。年間数百万人のファンが訪れます。このように近年、観光の新手法としても注目される「ブックツーリズム」の観点で、「豊橋」をリサーチし、これまでにない「読書で歩く」小説を書いてみたらいったいどんな作品ができるでしょうか？（ナカムラクニオ）

まち小説のつくり方

1 散歩してみる
気になるモノ・コト・ヒトをメモする

2 話を聞いてみる
小説の題材になりそうな場所に突撃取材

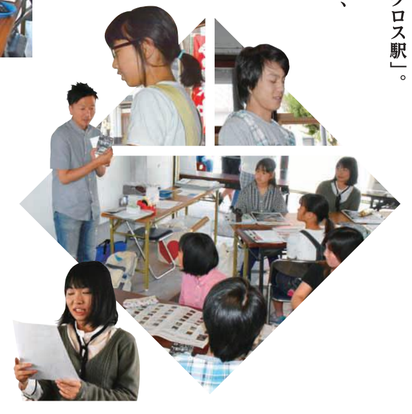
3 題名を考えてみる
集めたキーワードをつなげて面白いタイトルを考える

4 あらすじを考える
起承転結になっていなくてもOK

5 最後まで書いてみる
とりあえずできるところから書いてみる

6 推敲して完成させる
誤字脱字を確認し、完成

小説執筆ワークショップ



街は巨大な図書館。図書館は巨大な街。

ナカムラクニオさんが講師となり、水上ビルを舞台に小説を執筆しました。10代から60代の幅広い年齢層の15人が参加。まち歩きを行い商店街の気になるヒト・モノ・場所を選び歩いていると、懐かしいお店やレトロな看板がたくさんあり不思議な国に迷い込んだみたい…
その後、ひたすら原稿に向き合いそれぞれのまちの「物語」を紡ぎました。

参加者が
執筆した小説を
1冊の本にまとめました。

ビルになった船たち

朝岡みゆき

牟呂用水ができて間もなくして、船が走り始めた。その船は、川幅に合わせて造られたため横幅は狭いが、縦に細長く、高さもビルの三階から五階建てほどある大きな船だった。船は、いつしか十五隻が集まり、およそ八百メートルにおよぶ長い列を作った。

造船されてまだ新しいその船たちは、牟呂用水から三河湾へ出て、太平洋という大海原を目指していた。まるで町を出て大都会を目指す若者のように。

船たちは、豊橋駅を手前にして、一時、停泊することにした。先頭を走る船が、「ここで少し休もう」と一番手の船に提案すると、それは次々と伝達され、最後尾の船から、「いいね、そうしよう」と返事がきた。街の中で、再び出航する日までの短い時間を過ごすことで、全隻の意見は一致した。

しかし、そうしているうちに、荷も積まず、人も乗せない空っぽの船に、人が集ってきた。二階部分には、花火店や駄菓子店、喫茶店やバーなどの店舗が入り、二階以上の部分には、居住スペースとして人が住み始めた。店舗や住居人のもとを人が訪れ、船の周辺で生活を営む街の人々との交流も生まれた。

やがて、船たちは、花火店や駄菓子店に来る子供たちの笑顔に癒され、喫茶店に集まる人々の三河弁丸出しのばか話に一緒に笑い、眠れない夜は、バーから聞こえてくる優しいジャズの音色に客とともに耳を傾けた。

船たちは、街の中で、朝陽が上がれば街とともに目覚め、昼には街の人々とともに生活を営み、夜になれば街とともに深い眠りについた。もはや、船たちは、空っぽの船ではなかった。

船たちは、街の灯火の「つ」となることを決めた。まるで、夜空の星と星が線を結んで、美しい星座を作るように、灯火と灯火が線を結んで、人々の思いを繋ぐ絆となった。

先頭の船が、「どうだん、ここで暮らすまいか」とすっかり馴染んだ三河弁で、二番手の船に相談した。それは伝達され、最後尾の船を折り返して、次々と返事が戻ってきた。「いいじゃん、そうしまい」と。

船たちは、用水路に浮かんで漂う生活から、用水路の上に建つビルとして生きる道を選んだ。船たちは、十五隻の船から、十五棟の連なるビルになった。

それから、五十年が経った。ビルたちは、いろいろあったけれども、いい人生だったなあ、と振り返る。それでも、足元に水の流れる音が聞こえた時は、ふと思うこともあった。もし、あの時、太平洋を目指していたらと。選ばなかった人生など存在しないことはわかっているのに。

夜空に北極星を見つけると、北極星を目印に大海原を航海する姿を想像して、心が小さく揺れた。そんな時は、ほんの少しだけ、ビルの位置が前へ進んでいたのかもしれない。

※その他作品はHPでご覧いただけます。「ブックトープ豊橋」で検索

その他プレ事業

豊橋市では、まちなか図書館（仮称）の目指すサービスを、開館前から試行的に実施し、新しい図書館の活動イメージを伝えています。

パラレルキャリア×コーワーキングスペース

パラレルキャリア講座
～未来の自分を編集する～

コーワーキングスペース トライアルビレッジを会場に、「パラレルキャリア～新しい働き方を考えるヒント100」の著書ナカムラクニオさんを講師に迎え、新しい生き方、自分の将来等について皆で考えました。

盛り上げ隊！のんほい×獣医師

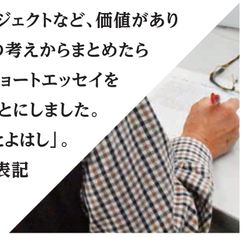
FM豊橋
モエモエと語る、
ここがスゴイぞのんほいパーク！

豊橋市が誇る施設の「つ」であるのんほいパーク（豊橋総合動植物公園）について、その魅力やスゴイところを、日々その情報を発信している「のんほいパーク盛り上げ隊！」の皆さん、職員である獣医師、公募した市民らが紹介しました。

お問合せ＝豊橋市役所 都市計画部 まちなか図書館整備推進室 〒440-0897豊橋市松葉町2-10 ☎0532-55-8102 ■発行＝平成30年3月 ■制作＝株式会社 エクスラージ（アートディレクター・共田慎性／デザイン・山本訓之）

とよはしのシチズンシップ

豊橋ってどんな街だろう。これからどんな可能性があるんだろう?
「シチズンシップ」という考え方があります。
地域に愛情、誇りを持ち、当事者意識を持って
街の未来を想う市民参加型の考えです。
豊橋のお店、人、祭り、プロジェクトなど、価値があり
面白いと思った対象をこの考えからまとめたら
どうなるんだろう?そこで街のショートエッセイを
書いて見ることにしました。
たんなる宣伝ではありません。未知の「とよはし」。
あえてひらがな表記
「とよはし」にして「豊橋」を
新しく読みかえようと
思います。
もちろんライターは
豊橋市あるいは
近接する場所に住む
市民の方々です。



作品例

手筒がハネたら

桑原裕明

「祭りに参加して手筒花火をやりたい」と軽はずみに言ってしまったのは、飛び散る火の粉を体に浴びる勇壮さに、これはモテる!と直感してしまったせいだ。こんなにも膨大な時間と手間、集まれば、ほぼ100%、酒の付き合いが伴う。そうと知っていれば絶対にやらなかった。激しいノリについていけず、濃厚な人間関係にはほとほと疲れた。もう二度とやるもんか。

それなのに、手筒の最後「ハネ」と呼ばれる筒の底がズドンと破裂する爆発の衝撃は、そんな思いの全てを吹き飛ばしてしまうから厄介だ。空っぽになった脳裏には試練を乗り越えた達成感と祭りのあとのセンチメンタルのみが焼き付いてしまうのだ。

こうして、まんまと手筒の虜になってしまうのはどうしようもない豊橋人の性なのだろう。何だかんだモテるしね(笑)

ランゲルハンス島と金色島と豊橋駅

山下智江子

十年ほど前に急性膵炎にかかった。食事療法のため膵臓の病気にまつわる本を読んで、ランゲルハンス島という器官が膵臓にあることを知った。そもそも膵臓がどこにあって何をする臓器なのか考えたこともなく、身体の中に「島」があることを知り驚いた。

豊橋公園の北側、吉田城から見下ろせる場所に金色島(こんじきじま)はある。島と名が付いているが、実際は陸続きである。一級河川の豊川(とよがわ)河口近くにある砂州で、中央部に繁茂するこんもりとした森や砂場が夕日に照らされ金色に輝くことが名前の由来になったらしい。毎日目にしているのに、気にもしていなかった「島」が職場の近くにもあった。

豊橋駅は、全国的に知名度は低いが、豊橋市民にとっては自慢の「新幹線のひかりも停まる駅」だ。たとえ気づかれにくくても、ランゲルハンス島のように重要な役割を果たし、金色島のように輝いている「ひかり」は、けっこう身近にたくさんある。

※その他の作品はホームページでご覧いただけます。
「とよはしのシチズンシップ」で検索

表現力向上ワークショップ

左記作品は、「表現力向上ワークショップ」の参加者による作品です。図書館をもっと情報を「発信」する場所としたい!そんな想いで、表現力向上ワークショップを昨年度から開催しています。「まちづくりに繋げる図書館」という基本理念を掲げていることから、作品のテーマを「シチズンシップ」としました。

目指せ、豊橋ライターズコミュニティー

参加者同士の仲間づくりを目指し、昨年度の講座の受講者が今年度の講座の講師となり、より近い目線でお互いに学び合いました。

トークセッション「“本のあるまち”のつくり方」

平成29年6月11日(土)“本のあるまち”をテーマに、
6次元店主 ナカムラクニオさん、
大豊協同組合代表理事黒野さん、穂の国とよはし芸術劇場
PLAT 芸術文化プロデューサー矢作さんをお招きし、
トークセッション「“本のあるまち”のつくり方」を行いました。
使われなくなった電話ボックスを図書館にするプロジェクト、
米国発祥で世界に広がっている自宅前に設置するマイクロライブラリー、
古書店のまちとして再生したウェールズのヘイ・オン・ワイの取組みなど、
ナカムラさんが紹介する刺激的な事例をきっかけに、図書館への期待が語られました。

図書館をまちづくりに生かす

ブックカフェ6次元店主 ナカムラクニオ

荻窪のブックカフェ「6次元」店主、映像ディレクター。実験的な読書会や、その場で小説を書くワークショップ等、年に200回程のイベントを開催。町の空きスペースに図書館をつくったり、町全体を小説化する「ブックトープ山形」プロジェクトなどの企画・運営も行う。

本はただの紙の束ではない

今やデジタル本などもあって、本という概念が拡張している。同時に、本は紙の束でないことに人々は気づき始めた。人と人とを繋ぐ力など、本がもつモノとしての力が再認識され、本や図書館がまちづくりで取り上げられることが多くなった。本を媒介に人と人とが出会い、知識を提供しあうことが、今の図書館には求められている。

大豊商店街(大豊協同組合代表理事)

黒野有一郎

一級建築士事務所建築クロノ代表。水上ビル生まれ。現在、大豊商店街(大豊協同組合)代表理事を務めるほか、「とよはし都市型アートイベントSeboneセボネ」実行委員、「駅前デザイン会議」常務理事兼事務局として「あいちトリエンナーレ2016」豊橋会場のおもてなしまちづくり」を主導するなど、「アートによる

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT 芸術文化プロデューサー

矢作勝義

2012年4月より穂の国とよはし芸術劇場PLAT開設準備のため(公財)豊橋文化振興財団事業制作チーフに就任。2015年4月より芸術文化プロデューサーへ。愛知大学文学部現代文化コースメディア芸術専攻にて非常勤講師を務める。

本と劇場の親和性

本と劇場は親和性がとても高い。一番は脚本。お芝居はすべて脚本があってスタートしている。シェイクスピアの時代からの様々な脚本も残っているし、今も新しいものがどんどん出てきている。ただ、一般的な人にとって手に取りにくいところや目に触れやすい場所にないのが脚本の弱いところ。だからこそ、穂の国とよはし芸術劇場PLATの交流スペアの一角にそういった脚本をはじめとする本を手軽に見れる場所、手に取れる場所を提供することで、本を介してより劇場を楽しむことができる仕組みが展開できればいいと思う。

本を介して人が集まれる場

今はアートであれ音楽であれ、どんどんまちにでて、得意なパートで地域と関わろうとしている。豊橋のまちなか図書館も、本を介して人が集まれる場をつくろうとしていて、商店街の活性化に繋がるのではないか。

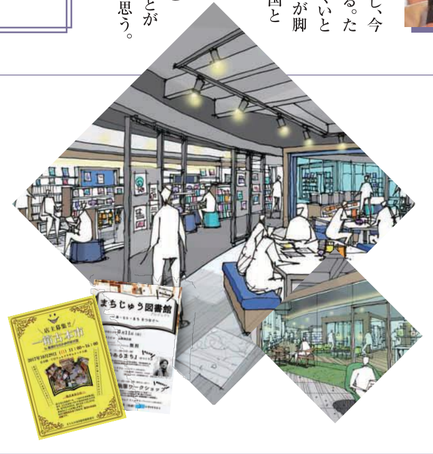
まちじゅう図書館プロジェクト

本を活用し、交流を生む。

お店の一つ一つが小さな図書館となって、まち全体が本を通した交流を生む場所へ。水上ビルエリアでまちじゅう図書館プロジェクトが進行中!

まちじゅう図書館とは?

長野県小布施町の図書館まちとしょテラソが、町角の「本のある場」を通じて人と人が繋がることを願いスタートし、全国に広まる。まちの個人宅やお店の少しのスペースに置かれた好きな本でお客さまとコミュニケーションを楽しむ、私設図書館。



新しい図書館がどんなものになるのか。それを推理する手がかりが、整備推進室の行う「はじまるよ!プロジェクト」の市民参加イベントにある。

これまで2年連続して行われた「表現力向上ワークショップ」は、まちの魅力を表現するための技術を出版のトップ編集者から学び、作ったショートエッセイを豊橋市のホームページで発表する、というものだった。

また、商店街主催イベントと連携した「まちじゅう図書館キックオフイベントin雨の日商店街」では、豊橋の名物建築でもある「水上ビル」を題材に小説を執筆。こちらも完成した作品を冊子にして発表するとのこと。

これらのイベントから浮かび上がる「まちなか図書館」像は「市民の情報発信を支援する機関」だと言える。また「情報を発信したい市民が集い、出会う場所」にもなりそうだ。

図書館は情報を集積する機関だ。しかし集積してあるだけではその情報は十分に活用できない。さまざまな情報の組み合わせで、その情報の価値が最大になるよう、図書館の司書は考える。10の情報をもつ本が2冊、並んでいるだけでは情報の量は10+10=20にとどまる。しかしその2冊が出会い、反応を起こすことによって10×10=100の情報が生まれる。3冊ならば1000だ。

まちの情報は「ひと」だ。「ひと」が孤立したままの状態では、その情報は足し算にしかならないが、交流が生まれることによって掛け算になる。

「まちなか図書館」は「まちの掛け算装置」になるはずだ。市民が情報を持ちよれば、そこで掛け算が行なわれて、まちの情報が飛躍的に増大する。それがまちを、いっそう面白くするに違いない。

bibligare コラム

田原市図書館 主務嘱託司書 大林正智

民間企業勤務後、2007年、司書資格取得。大学図書館勤務を経て2010年、田原市図書館へ。

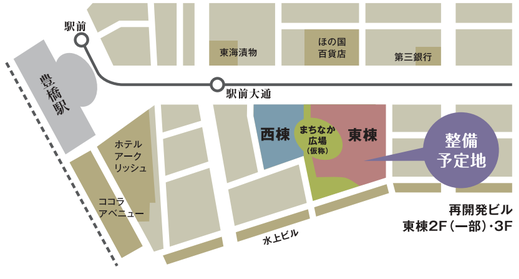
「まちの掛け算装置」に

まちが胎動している。まちなかを歩いていてそんなふうに感じるようになった理由は、新しくできる「まちなか図書館」の存在だ。まだ着工していないにもかかわらず、その誕生をきっかけに、まちが新しく生まれ変わろうとしている、そんな予感が通りにあふれる。

まちなか図書館(仮称)の概要

- 導入規模 — 4000㎡以内
- 導入予定位置 — 再開発ビルの東棟2階の一部、3階
- 蔵書数 — 10万冊程度(開架を基本)
- 開館予定 — 平成33年度中

平成29年度は、図書館内装工事に関する基本設計を行い、中央図書館・プラット等で説明会を開催しました。



詳しい内容については、ホームページをご覧ください。
「豊橋市まちなか図書館(仮称)」で検索